

「人間喜劇」セレクション第7巻 金融小説名篇集 オノレ・ド・バルザック著

藤原書店・本体価格三〇〇円 吉田典子、宮下志朗訳

今だからこそ理解できる バルザックが描いた人間像

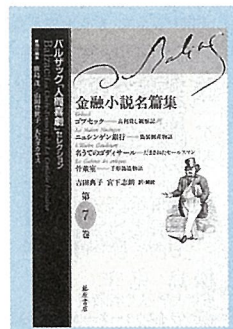
評者 北村行伸・一橋大学経済研究所助教授

フランスの文豪バルザックは一七九九年生まれで、昨年は生誕二〇〇年ということでバルザックに関するさまざまな書物が出版された。本書もその一冊である。この『バルザック「人間喜劇」セレクション』の仕掛人であるフランス文学者の鹿島茂氏は「いま、なぜバルザックか」という問いに答えて、「日本が『貧困と禁欲』の社会から、『贅沢と欲望』の社会に移行した現在だからこそバルザックを理解できる状況が生まれたと訴えたかったことです。刻苦勉勵型の文学がすべて無効になってしまった状況の中で、人間の欲望というものを否定せずに正面から見据えたバルザックが、どんな文学よりも有効性をもっているのだと声を大にして叫びたかったからなのです」と述べている。

前半のフランス社会経済風俗を見事に描き出した万華鏡のような作品集である。しかし、バルザックは単に、さまざまな人物の面白いエピソードを集めただけの小説を書いたわけではない。ここでは主要な人物を別々の作品に相互に登場させて、「人間喜劇」全体に厚みを持たせたり、広く現実の生活から観察されたいくつもの歴史的事件やエピソードに基づいて、ひとつの大きな小説空間をつくり出すという手法を用いることで、フランス社会を立体的に描くことに成功しているのである。

新興勢力への移行劇

本書の最大の魅力は、小説に登場する人物である。貴族社会の片隅で高利貸しを営みながら社会と人間に関して鋭い観察眼をもったゴブセックは、バルザックの表現を借りれば、「焼きの魂」の持ち主である。このゴブ



著者のプロフィール
Honoré de Balzac
1799~1850年

20歳代で家族等の資金援助を受け出版業、続いて印刷業、活字鑄造業と手を広げるが失敗。「あら皮」などの成功で人気作家となった後、新聞社の株を取得するも失敗。全17巻「人間喜劇」出版完了の2年後死去。

セックは財力によって人間の運命を支配し、世界を所有できることを確信している旧世代に属する人物として描かれている。いま一人の魅力的な人物は、『骨董室』に登場するデグリニョン家の奉公人シエネルである。バルザックは彼を次のように描写している。「シエネルは、私生活なるものを知らぬ、偉人のひとりであつたばかりか、ひとつの偉大なる事象でもあつたのだ……シエネルの美德とは、本質的に、貧困なる民衆と、栄華ある特権階級とのあいだの階級

に所属するものなのである。この中間的な階級とは、ブルジョワのつましい徳と、貴族の崇高な思想とを兼ね備えることで、後者の考え方を、実質的な教育の光によって啓蒙することができるのである」。

これら小説はさまざまな読み方が可能である。もともと標準的な読み方は、フランス革命による共和制の誕生、ナポレオンの帝政から、帝政復古までの社会的な大変動の時代に

おける、貴族階級から新興ブルジョワジーへの勢力の移行劇として読むことであろう。もうすこし専門的に読むこともできる。例えば、本書に登場する、宝石などの買戻し条件付き売却取引は、現代ファイナンスでレポ取引として重用されているものの原型であるし、出張セールスマン、ゴディサールの売らんとする生命資産保険は人的資本理論に基づいた信用貸付けの一種である。偽装倒産を繰り返して大きくなっていくニュシゲン銀行の戦略は市場規制の入れない、いわば完全自己責任の時代におけるリスク転嫁の成功例と見ることができ、わが国は大きな変革期にあり、旧勢力が新興勢力に取って代わられようとしていることは疑いのない事実である。新聞紙上ではゴブセックやニュシゲンに相当する人物の話にいとまがない。いま、バルザックを読む意義はことのほか大きいのである。

この本の目次

- ゴブセック——高利貸し観察記
- ニュシゲン銀行——偽装倒産物語
- 名うてのゴディサール——だまされたセールスマン
- 骨董室——手形偽造物語

訳者解説

- 対談「ナニワ金融道」とバルザック (青木雄二、鹿島茂)
- 借金で鍛えられたバルザック
- 唯物論者、バルザック